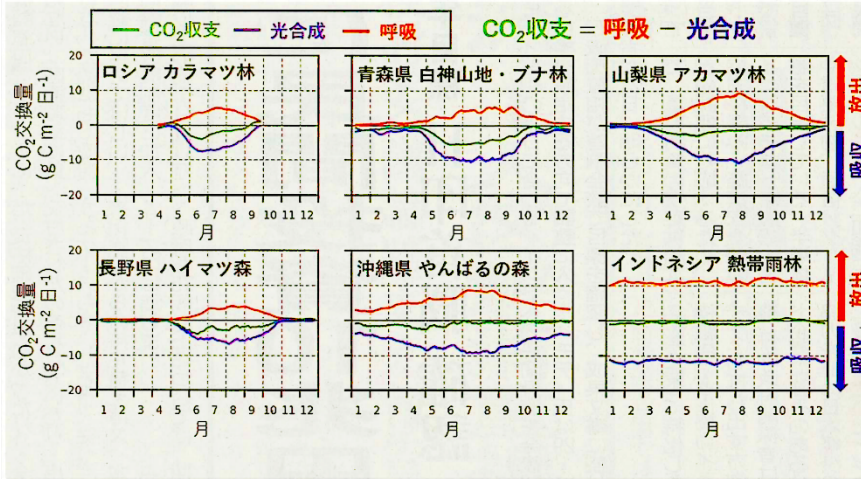


白神山地 CO₂吸収量3位



各観測地点のデータから作成されたCO₂の放出・吸収の収支グラフ。白神山地ではCO₂の吸収が他地域よりも多かった (大阪公立大学提供)

弘大など国内52地点観測

弘前大学が参画する共同研究グループは、アジアの森林や水田などが二酸化炭素(CO₂)を、どの程度、吸収・放出しているかを示す長期の観測データをまとめ、大規模オープンデータ「JapanFlux」(ジャパンフラックス) 2024」として公開している。アジア初となる取り組みで、地球温暖化対策の基盤となる情報として注目されている。白神山地の観測地点(鱒ヶ沢町)では国内52地点のうち3番目にCO₂の吸収が多く、白神のブナ林が温室効果ガス抑制に大きく貢献していることが示された。

温暖化抑制、データ公開

オープンデータは、日本や中国、東南アジアなどの83地点で、気象観測機器によって得られた情報を統合したもの。対象期間は1990年から2023年まで。森林や水田がどれほどCO₂を吸ったり出したりしているかを30分ごとに記録しており、日ごとの変化や季節ごとの違い、長期的な傾向を明らかにしている。



石田 祐宣准教授



白神山地のCO₂の吸収・放出量を観測しているタワー(鱒ヶ沢町) 石田准教授提供

(菊谷賢)

この変化がCO₂吸収量にどの程度影響するか、今後とも観測を通して見守っていきたい」と話した。これまで欧米では、CO₂収支のデータ整備が進んでいたが、アジア地域では統一した基準に基づくデータ集約がなく、地域全体の評価に不確実性が残っていた。共同研究チームは「データの公開は、カーボニュートラル、脱炭素社会の実現などの政策に貢献すると期待している」とコメントを発表している。

データは国立極地研究所のアーカイブで公開されている。研究の成果は21日付で国際学術誌「Earth System Science Data」のオンライン速報版に掲載された。

※この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。東奥日報社に無断で転載することを禁止します。

[問合せ先]
弘前大学理工学研究科
E-mail:r_koho@hirosaki-u.ac.jp